

岡山孤児院音楽隊を巡る音楽環境と、近代日本における キリスト教 Band 文化の萌芽をめぐって

山本美紀

I. はじめに：キリスト教バンド文化と大衆

石井十次（1865 - 1914）による岡山孤児院とその音楽隊の研究は、これまでもすでに多くの先行研究が存在する。一般的に同志社出身と理解されるものの、実際には混沌とした石井十次の宗教観とそれに支配された思想研究、またその実践としての福祉事業研究、広い行動範囲を得た音楽隊の変遷など、キリスト教の影響を受けた実に様々な近代日本のケーススタディが可能であるからだろう。音楽隊についての研究は、「音楽」と名前のつくものの、実際には音楽以外の分野で研究が続けられてきた。それら先行研究の中に、例えば一色哲による「メディアとしての音楽幻燈隊と岡山孤児院」や、細井勇による『石井十次と岡山孤児院』における「慈善音楽幻燈隊」の扱いはある。一色哲は音楽幻燈隊の全国的な活動と、それを可能にした「ネットワーク」に注目したものである。それによると、音楽幻燈隊は「外部運動」に組み込まれており、まずは「音楽隊」が孤児院の運営資金集めに利用され、その後「大挙伝道」に使われることを契機に「音楽隊」と「幻燈会」が結び付けられて、組織だったものとなったという（一色 1995 : 52 - 53）。また、大挙伝道に利用されるようになってからの活動は『孤児院新報』の記事から、1902（M35）年の 1 年間だけでも 34 の都市を数え、それぞれの都市に最大 20 名もの「発起人」を立てていたとし、岡山孤児院を支援するネットワークの存在を指摘している。一方、「音楽幻燈隊」の活動を「岡山孤児院事業」としてとらえた細井は、1900（M33）年から 1903（M36）年の音楽幻燈隊（慈善音楽幻燈隊）の活躍によって、寄付金集めの目途がついたとする（細井 2009 : 305）。

いずれの研究も、近世から近代への大転換の中で岡山孤児院と音楽隊が、日本の社会福祉に与えた影響を明らかに示しており、大きな成果である。しかし、これらの研究がこれまで着目してこなかった音楽的事象にすることで、取りこぼした点を補い誤解を修正できだけでなく、さらなる広がりを持った研究領域との接続も可能となり、より深く広範囲の分野において意義ある研究となることは明らかである。現時点での考えを先取りして言うと、そのキーワードの一つは「大衆化：popularization」ではないかと思っている。もちろん、「キリスト教文化の」という言葉が背景にある。その理由は、石井十次と岡山孤児院音楽隊の変遷や、同時期に影響を与え合った音楽環境へのアプローチは、軍楽隊や唱歌教育などといった、

いわば上から発信された音楽的活動が、地方都市やその周辺地域も含めた一般庶民に浸透する（消費されていく）プロセスでもあると考えられるからだ。

そこで本稿では、音楽隊が始まる以前の岡山孤児院の日常的音楽状況から初期の音楽的事象をとりあげ、どのようなものであったかを考察する。さらに、石井十次の音楽隊に影響を与えた教師や当時の音楽環境から、一般庶民が触れたキリスト教を背景とした音楽活動の特徴と実態に迫るものである。

II. 石井十次と岡山孤児院、音楽隊についての概要

i. 石井十次と岡山孤児院

石井十次は 1865 年(慶応元年)、宮崎県児湯郡上江村馬場原（現・宮崎県高鍋町）に生まれた。時代の転換期に紆余曲折を経て、病をきっかけにキリスト教を知り、つてを頼って岡山県立医学校に入学する。しかし、新島襄「同志社趣意書」を読んで強く心を動かされた（1884 (M17)年 7 月）彼は、翌月には故郷で馬原教育会と朝晩学校を開く。この後も、何かを読んだり聞いたりして強く心を動かされては即行動に移す、という彼のパターンが生涯続く。時にはそれが 180 度の方向転換を伴うこともあり、周囲は石井の人格に魅了されながら振り回されつつ、彼を支えるのである。1884 (M1)年は、彼が岡山教会で金森通倫から洗礼を受けた年でもある。数年後、彼は持病の治療もかねて岡山県邑久郡上阿知村の診療所に代理診療医として赴任した際、1 人の貧児（貧しさのあまり、養えない子どもを母親から託される）を預かったのをきっかけに、孤児教育会（1887(M20)年 9 月。後の岡山孤児院）を設立¹。これにはサミュエル・スマイルズ『自助論』に出てくる靴職人バウンズ²や（山本 2007,64）、ジョージ・ミュラーの来日（1886(M19)年末- 1887(M20)年）の影響があるとされている（細井 2009, 11）。

細井は著書『石井十次と岡山孤児院』で、岡山孤児院創設には石井十次にとって「『国家の良民』の育成」「『神の業』としての慈善事業」という 2 つの側面が当初からあり、孤児院経営はこの両面の間で大きく振れながら展開していくと指摘する（細井 2009, 119-121）。そのような石井十次と岡山孤児院の時間の流れについて、細井は菊池による 10 期に分けた時代区分を採用する³（細井 2009, 29）。しかし、当該引用箇所が不明であるため、同じ菊池の以前の研究成果から、明治期に限定して孤児院の実践とそれを規定した財政状況によって 6 期に区分したものを以下に記す（菊池 1999, 247）。ちなみに菊池は、長年岡山孤児院について実証に基づき系統的に追った研究成果を数多くあげている。音楽隊の活動は、楽器や楽譜や制服等の調達、指導者の招聘、練習時間の確保、交通費など、初期投資（支出）がなければ不可能であると同時に、当初から孤児院運営の資金調達（収入）に用いられた手段であったため、岡山孤児院の財政と実践の区分は音楽隊の背景や実績をみるときにも有効である。

<表1> 岡山孤児院: 財政状況による時代区分(菊池 1999,247 より山本が加筆作成)

期		年代	項目
第1期	始	1887 M27 年 9 月	貧児預かり
	迄	1890 M23 年 11 月	労働教育並行主義の実践(孤児院内に活版部・米搗部設置)
第2期	始	1890 M23 年 12 月	労働教育並行主義の実践続行(孤児院内に次々と実業部を設置)
	迄	1897 M30 年 12 月	「時代教育法」を案出。私立岡山孤児院尋常高等小学校設立
第3期	始	1898 M31 年 1 月	音楽幻燈隊による寄付金集め開始
	迄	1905 M38 年 12 月	里子制度を試す。石井十次、韓国に赴き、韓国少年を受け入れ。
第4期	始	1906 M39 年 1 月	孤児院音楽隊、清国に遠征
	迄	1910 M43 年 12 月	大阪事務所改築
第5期	始	1911 M44 年 1 月	1914 年 1 月 30 日に石井十次永眠
	迄	1914 T3 年 12 月	
第6期	始	1915 T4 年 1 月	大原・大庭による、事業の再編と整理。孤児院の解散
	迄	1926 T15 年 8 月	

ii. 岡山孤児院音楽(幻燈)隊について

菊池によると、音楽隊(幻燈隊ではない)が結成されたのは1893(M26)年11月とされており、上の時期区分をみれば、第2期のことである(菊池 1997a, 70-71)。その後、第3期に入ると、音楽隊は孤児院(石井十次)側からみれば資金調達の集金マシンとして機能し、また社会的には近代的な慈善活動のモデルとして啓蒙していく働き⁴を果たしたと考えられている(菊池 1997a, 69)。菊池は、同じく音楽隊の活動についても時代区分を試みており、それぞれテーマを伴って以下のようなものである。

期		年代	項目
第1期	始	1893 M26 年 11 月	音楽隊草創期。風琴音楽隊(指導者:三谷+D22:D33 寅吉)だったのを、プラスバンドの音楽隊(指導者:三谷種吉)に編成を変える(1896 M29 年)。
	迄	1897 M30 年 12 月	
第2期	始	1898 M31 年 1 月	試行錯誤と中国四国地方の巡回公演期、青年音楽隊解散(6月)
	迄	1899 M32 年 12 月	
第3期	始	1900(M33)年 1 月	青年音楽隊再結成(1月)日本全国への巡回(九州全域・関東信越・北海道)
	迄	1903(M36)年 2 月	
第4期	始	1903(M36)年 3 月	音楽活動写真隊に名称変更。青年音楽隊巡回停止と解散、少年

	迄	1905 (M38) 年	音楽隊結成と巡回。
第 5 期	始	1906 (M39) 年 1 月	2つの音楽活動写真隊が結成される(1906 年-)。1908 年、音楽隊全廃、活動写真隊のみに(1908 年 8 月-)。
	迄	1908 (M41) 年 8 月	
第 6 期	始	1908 (M41) 年 8 月	寄付金募集の中止。労働自営への方針転換
	迄	1911 (M44) 年 11 月	

<表 2> 岡山孤児院音楽隊:活動状況による時代区分(菊池 1997a,69 より山本が加筆作成)

第 1 期の終わりごろ (1897(M30)年 12 月) には、音楽隊による全国巡回が石井により準備されており、そのころの楽器の編成は「クラリネット 2 個、コーネット 1 個、アルト 1 個、バリトン 1 個、バス 2 個、大太鼓 1 個、小太鼓 1 個、シンバル 1 個、トライアングル 1 個、府管 1 個、手風琴 1 個、ヴァイオリン 2 個、計 12 種類 15 個」⁵ (菊池 1997a, 111) であった。音楽隊の構成員は、当初は青年音楽隊として高等 3 年生終了生で構成され、青年音楽隊解散後の音楽少年隊は高等 1 年生 (12 歳) で訓練を始め、高等 3 年生で巡回チームとして編成される、ということであったようである (菊池 1997a, 111)。

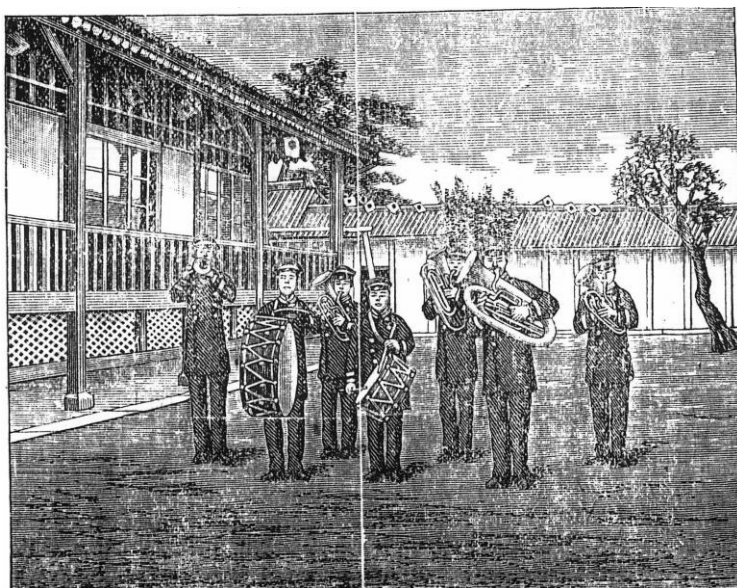


図 1: 1898 M31 ごろの岡山孤児院音楽隊 (『岡山孤児院新報二十一号』1898 年 10 月 13 日発行より)

さて、「音楽隊 (風琴音楽隊)」の設置当初 (1893(M26)年 11 月) は、もっぱら伝道の目的で結成された。というのも、そもそも「音楽隊」の設置が、ペテー師らによる東洋救世軍の軍楽隊のための献金がきっかけであったためだ⁶。このころの石井は、東洋救世軍についての構想に明け暮れており、「孤児院事業」と「東洋救世軍構想」は別のものとして考えていたふしがある。同じ『岡山孤児院月報』第 4 号 (以下『月報』) で石井は、「今マハ孤児院設立以来未曾有ノ困難ナリ」とはっきりと書いており (同 9 面)、さらに日ごとの

収支を「本日収入金／支出金／不足金・残金という具合にすべて記載しているが、そこにこの金額を組み込んでいないのである。ペテ等宣教師からの東洋軍楽隊楽器購入のための献金のあった当日は、「明朝迄ノ米代ニハ尚ホ三、二二四ノ不足ヲ告グ」（同前）とまである。

同一人物による 2 つの事業「孤児院運営」と「東洋救世軍」が並行して走っていたとみなされ、ということはこの時点で岡山孤児院のなかでも実態としては未だ流動的であったことがうかがえる。だから、この時点で言えるのは、後に触れる三谷寅之助の「風琴」の演奏を聴いて感動した（あるいは、伝道に役立つと直感した）石井が、風琴を入手できるように宣教師に働きかけ、結果、風琴と他の楽器がいくつか購入されたということのみであり、それが孤児院において「孤児院付属の音楽隊」としてはっきりと存在していたとまで断言するのは難しい。

それがやがて「音楽幻燈隊」となって、全国ばかりか海外にまで遠征して集金マシンの役割を果たすことになったのは、偶然の産物とも言える。石井十次は、岡山孤児院を宮崎県茶臼山に移転しようとしていた。しかし、最初の移転時（1897(M30)年 9 月）に、到着した幼児 3 人から赤痢が発生し、300 円の支出が必要になると共に、高鍋村に非常な迷惑をかけることになった。そこで高鍋村への謝罪とお礼を兼ねて、音楽隊が岡山から呼ばれたが、それが好評であったのが、音楽隊巡回の直接的なきっかけとなったのである⁷。

岡山孤児院音楽隊の概要はここまでとして、次に、岡山孤児院音楽隊の近代日本音楽史における位置について確認しておこう。

Ⅲ. 岡山孤児院音楽隊の背景となった孤児院内の音楽的活動と音楽隊の結成期

i. 岡山孤児院音楽隊の近代日本音楽史の時間軸における位置

先述したように、最も初期の形である風琴音楽隊が結成されたのは、1893 (M26) 年 11 月である。この時期を<資料 1>年表で確認すると、都市部で市中音楽隊が活動しており⁸、子どもが主体になってバンド活動を行ったスクールバンド隆盛期の中でも初期に位置することがわかる。1890 年代の前後、岡山に拠点を置く石井十次がどのようなバンド（音楽隊）を目にしていたのかははっきりしない。しかし、明治の松江市の音楽活動を「楽隊」に焦点を当てて緻密に追った上野によると、岡山孤児院音楽隊の松江公演のことに触れて、楽隊の演奏が明治 30 年代においても非常にめずらしいものであったとしている。

「明治期における松江市の音楽文化の状況は不明なことが多いが、明治 31 年（1898）6 月に岡山孤児院の巡回幻燈会が行われている。おそらく、大きな影響を与えたに違いない。この当時、余興とはいえ、当地において楽隊の演奏は極めて珍しいものだったからである。-中略-おそらく街中に噂が広まったのだろう。会場は人であふれた。「彼の岡山孤児院の基本金募集幻燈音楽隊は去四五の両

夜天陣榮座において幻燈音楽を催せるか 聴衆は殆んど立錫の余地なかりし」-中略- 2回公演を考慮すると、相当多くの人が楽隊の演奏に触れたのではないだろうか」（上野 2010, 20）

また、音楽隊の終わる 1911 (M44) 年末頃には、三越少年少女音楽隊を初めとした「少年少女」の「音楽隊」が活動を開始する時期でもある。このことから推測されるのが、「子どもによる音楽隊」のイメージを、全国ツアーによって岡山孤児院音楽隊が定着させたということである。少年少女音楽隊の勃興はそれによるものであり、やがて結果宝塚少女歌劇へとつながっていくということも、あるいは考えられよう。

このように見てくると、岡山孤児院音楽隊は日本の音楽文化の大衆化に非常な影響を与えたという仮定が成り立つが、その一方で、どこからこの発想が得られたのか、という疑問も当然出てくる。

一般的に今まで言われてきたことは、救世軍音楽隊の影響であり、組合派宣教師オルチン (George Allchin 1852-1935) の音楽を用いた伝道活動である。オルチンについては、岡山孤児院音楽隊が後に幻燈隊になるにあたって、幻燈機の購入を斡旋したり (菊池 1997a, 76) ⁹、自らの幻燈伝道会に岡山孤児院幻燈音楽隊を出演させる (谷岡 2001, 64) など、協力している。しかし、日本の救世軍宣教が開始 (開戦) されるのは、ライト大佐率いる 1895 (M28) 年の横浜上陸以来であり、さらに日本救世軍軍楽隊が結成されるのは 1902 (M35) 年で、岡山孤児院音楽隊よりもずっと後である¹⁰。

岡山孤児院音楽隊が救世軍の影響を受けたという根拠は、もっぱら山室軍平の石井十次追悼にあたっての以下の文章による。

「石井君も此の書物 [ブース『最暗黒の英国とその出路』] によりて啓発せられた処が大分あつたものらしい。 - 中略 - 孤児院に楽隊を設けたなども、この書に学んだことであつたと承知している。」 (山室軍平 1987, 428)

ちなみに、この記述は石井の死後 20 周年 (1934 年) に出版された『石井十次伝』に寄せられたもので、同種の内容が山室軍平『私の青年時代』にもあるが (山室 1929, 93)、そこには「楽隊を設けた」くだりは入っていない。石井は本を自ら読むのではなく、人に読み聞かせをしてもらっている場合も多い。救世軍創設者ウィリアム・ブースによる『最暗黒の英国とその出路』についても同様であり、当時同志社の学生であった山本徳尚に訳してもらいながら読んでもらったものである¹¹。この「訳しながらの読み聞かせ」がどのようなものであったかは定かではないが、少なくとも言えることは、救世軍の音楽について書かれていることはそれほど多くなく、むしろ初めて会った者同士が打ち解けるためのきっかけや、感動的回心へと導く手段のような使い方を救世軍はしているのである。

救世軍音楽隊との影響関係については後で詳述するが、このように、岡山孤児院音楽隊は救世軍の影響を受けたというよりは、初期においては岡山孤児院におけるいくつかの音楽活動を契機とした、「石井十次のインスピレーション」の発露であったと考えられる。

ii. 孤児院内の音楽的活動について—石井十次による音楽の3つの使い方

「風琴」購入までに岡山孤児院において、音楽的な事象がまったく無かったというわけではない。1892 (M25) 2月13日付『日誌』には「(二) 喇叭卒に院内巡吹を命ず」¹²とあり、さらに1893 (M26) 年8月29日付の『石井十次日誌』(以下『日誌』)には、「(一) 五時の喇叭をききて起床」とあるように、起床喇叭によって1日が始まる様子が書かれている。この「喇叭」の院内での使い方について、石井自らが「[月報] 第四号(十一月二十日発行)によれば(十月中記事)」として、同年大晦日の日付の日誌にまとめて書いてある。

五時の鳴鐘は忠実に喇叭手を喚起す彼等蹴起して衣帯を固め喇叭を手にして嚙啞たる数声起床を促しつつ院内を一巡す - 中略 - 全六時食事喇叭の響くや九組に分かれたる男女各其組に応じて食に就く三十分にして集合喇叭朝礼拝を報す - 中略 - [朝礼拝中] 「気を付け」の喇叭にて会を始め讚美の後に - 中略 -

全九時就床喇叭は凄寂たる其音調を以て一同を眠に導き院内肅然として又人語なし

(『日誌(明治二十六年)』, pp.377-378, 1962年)

このことから、まずは喇叭が院内の時報(シグナル・合図)として使われていたことがわかる。ここで注目したいのは、就床喇叭に使われたのは「凄寂たる其音調」とあることから、一定の長さのある、おそらくは短調のメロディーであったのだろうということだ。また、この時の喇叭が「隊」をなすものであったのか、それとも「喇叭手」が当番制で、当番に当たった者が順繰りに一人で担当していたかなどは不明である。

「音楽隊」であることには、少なくとも数人が同時に「合奏する」という状況が必要であるが、それに相当するのは、前年1892 (M25) 10月29日付けの『日誌』にある「喇叭隊四名が君が代を奏す」との記事である(『日誌(明治二十五年)』272頁)¹³。ただ、この「喇叭隊」が常設のものであったかどうか、あるいはこれをもって即「音楽隊」を結成したと見なすのは、上記のような理由から難しい。

1892 (M25) 当時、石井はすでに「救世軍」という言葉に心酔していた。そのため、伝道活動はあたかも軍隊の進軍のように表記され、伝道チームは日誌の中でもっぱら「軍隊」と表現される。例えば、10月29日付の『日誌』には「軍隊は市内に弾丸を配布、女子三人は田舎に向かって進撃」とあり、今風に翻訳すると「伝道チームはトラクト(キリスト教についてのパンフレット。)を配布、女子3人は田舎に配りに向かった」である。日誌の中

の「軍隊」はもちろん「(東洋) 救世軍」をさす。このように訳せるのは、この日(10月29日)に東洋救世軍最初の野外説教が行われたためである。音楽の記載が日記になく、音楽が使用されなかったのか、石井の印象に残らなかったのはわからない。ここからわかることは、伝道隊の前提が「軍隊」(この場合は救世軍)をイメージしたものであり、「孤児院音楽隊」の前提として「軍楽隊」が想定されていたことである。先に引用した「喇叭隊四名が君が代を奏す」も、この日の伝道会の終わりに演奏されたものであった¹⁴。

風琴音楽隊については、その言葉が1896(M23)年の秋以降に『日誌』や『月報』に出ているわけではない。例えば1896(M23)年11月3日の天長節の祝会で、「風琴」が個別にプログラムに掲載されていることから、1896(M23)年の11月時点で風琴音楽隊があったと見るのは、時期尚早なのではないかとも思われる。もし認めるとするならば、「音楽隊」とする定義を考え直す必要がある。つまり、岡山孤児院音楽隊はあくまでも今日的な「楽器の合奏」とみるのではなく、個々の楽器が個別に各曲を演奏するスタイルも「音楽隊」と評していた、つまり「楽器を伴った伝道チーム」を「音楽隊」とみなしていた、ということである。このことから石井の音楽の使い方についてもう一つ言えることは、石井が音楽を宣伝の際の注意喚起(「呼び込み」)に使っていた、ということである。これは菊池も指摘しているように、比較的早い段階から実行されており(菊池1997a, 72)、当時のジンタ(市中音楽隊)に近い使用方法だったと考えられる¹⁵。

[1893(M26)年7月16日付] 此ノ財政困難ノ際ニ当テ昨日ヨリ夏期学校ヲ始メ各所ヨリ多クノ金ヲ与ヘラレタレバ早天ニ佳雨ヲ得タルガ如キ喜ヲ以テ全院ノ感謝会ヲ開キ而シテ感謝ノ供物トシテ院内伝道軍ノ一隊ハ一枚摺ノ説教ヲ弾丸トシ草鞋脚半ニテ炎天ヲ犯シ旗ヲ翻ヘシ唳々タル喇叭ヲ吹き市内伝道ヲ始メ一枚摺ノ説教ヲ配布シ或ハ路傍説教ヲナシ壯快ナル運動ヲ終ヘテ帰院

(『月報』第1号, 3面1893(M26)年8月15日)

[1893(M26)年7月18日付] 午後二時ヨリ三十余名隊ヲ組ミ喇叭ヲ吹き上道郡倉柵村マデ伝道ニ行ケリ

(同前, 一面)¹⁶

もう少し、先ほどから出ている、風琴購入の依頼があった1893(M26)年10月直後の天長節(11月3日)での音楽プログラムに注目してみよう。そこには、以下のようなプログラムが『月報』第5号(1893(M26)年12月15日発行)に記されている¹⁷。

○三日 天長節

第二時ヨリ天長節祝会演説会ヲ開ラク

岡山孤児院音楽隊を巡る音楽環境と、近代日本におけるキリスト教 Band 文化の萌芽をめぐって

一 唱歌君ガ代 二 炭谷姉ノ祈祷 三 君ガ代喇叭 四 祝天長節演説
正富君 五 風琴 清水君 六 和氣清麿呂公出伝演説 小野田君 七 備
後三郎公伝演説 佐々倉君 八 一同忠臣ノ歌ヲ歌フテ散会
(『月報』第5号, pp.303-304, 1893(M26)年12月15日発行)

このうち、(五)和氣清麿呂公と(六)備後三郎公は備後三郎高德のことをさし、明治天皇の誕生日を祝う天長節らしく、共に「忠臣」を扱ったものである。

他にも次のようなものが確認される。

(九) 第九時より孤児院公会堂に於て西山君と江藤姉との結婚式執行 余興として高橋君剣舞
救世軍の音楽及び舞踏ありて中々に盛会なりき
(『日誌(明治二十七年)』, p.66, 1963年)

ここでは1894(M27)年3月9日の結婚式で、音楽隊の演奏が余興としてなされたことが記されている。天長節といい、結婚式での演奏といい、1893年11月に「音楽隊」として意識され始めた音楽隊の音楽活動は、この時点で「余興」としての利用がなされていた。石井十次による、3つ目の音楽の利用法である。そして、この3つ目の利用法が、1896(M29)年の本来のバンドの形に改編されることによってさらに強化され、後の全国巡回に耐えうる音楽隊を準備するのである。

iii. 風琴音楽隊からブラスバンドへ：初期の指導者とプログラム

岡山孤児院音楽隊がいわゆる「バンド」の形へと変貌していったのは、1896(M29)年のこととされる(菊池1997a, 73)。それ以前からも「種々の楽器を与え玉ひ喜び勇んであなたを讚美せしめ玉へ」¹⁸(『日誌』1896(M29)年6月22日付)や、「院役者談話会一、夏季休暇中音楽の練習をなすべし」(『日誌』1896(M29)年6月28日付)、「夏季休暇中毎夜文章会音楽会演説会剣舞会を開き手はいかん」「『ホワイト』館を機業工場内に建設して女学館とし文学裁縫音楽等を修むるの場所とせん可ならずや」(『日誌』1896(M29)年6月30日付)など、音楽についての構想が集中的になされている。これには、小野田鉄弥の働きかけ¹⁹が大きかったためと思われるが、石井の音楽への思いは1890(M23)年ごろからすでに折にふれ現れているのである²⁰。そのような構想が一気に現実化するのには、三谷種吉²¹が岡山孤児院を訪ね、石井が彼のバイオリンと風琴の演奏を聴いて、音楽剣舞会を開くことになったことが、直接的なきっかけとなったと考えられる(『日誌』1896(M29)年7月7日付)。そもそも、バンド化する以前の風琴音楽隊の着想を得たのが、種吉の弟である寅之助のオルガン演奏(1893(M26)年10月11日)であった。その感動を、石井十次は次のように示す。

〔1893 (M26) 年 10 月 11 日付〕 「(十) 晩三谷寅之助君の風琴三曲をきく (所感) 余は生まれて始めて音楽なるものをきき其の真味を悟れり」 (『日誌 (明治二十六年)』, p282, 1962 年)

オルガン購入のきっかけであり風琴音楽隊を作るきっかけとなった寅之助の兄、種吉が 1896(M29) 年 7 月 22 日に岡山孤児院を訪れ、バイオリンや風琴を演奏してくれた。石井は特別日誌にしるしてはいないが、祈りの成就を見る思いがしていたと思われる²²。その日に、石井は「音楽剣舞会」を開いてくれるように種吉に依頼する。7 月 24 日にはすでに「音楽部」の担当に三谷の名前を書き込んでおり、このあたりでもう話についてはいたのであろう。

この後三谷種吉は音楽教師として招かれ岡山孤児院での音楽指導にあたるが、この時点での石井の思惑は、音楽隊で何かしようという具体的な考え²³よりも、夏に向かったの孤児院の子どもたちの健康上への配慮もあったようである。

音楽師招聘 吾孤児院には追々暑気に向ひ健康上殊に注意すべき時節ともなりたれば暑間の労働により疲労も強かるべきにつき此夏期中は規定の夜学を休み音楽を学はしむることとなり、神戸の音楽師三谷種吉氏を招聘する筈なり。(『岡山孤児院新報』(以下『新報』) 第 1 号, 1 頁, 1896(M29)年 7 月 22 日発行)

やがて楽器が次第に整い、制服も新調されるにつれ、音楽隊は徐々に体裁が整えられていく²⁴。その年 (1896 (M29)年) の終わりにもなると、音楽隊の噂はある程度知れたようであり、12 月 4 日には岡山県議会議員の慰労会に呼ばれるようになる。しかし、音楽隊が順調な成長ぶりをみせたその矢先、12 月末に種吉が孤児院の音楽指導を突然辞めてしまう。

種吉が神戸に帰った後は、しばらく指導がなされないまま放置されていたようだが、東京から巡回公演にまわっていた東京市中音楽隊員が一時的に指導にあたった。ただ、この「東京市中音楽隊員」²⁵の指導が継続的に行われたものだったかどうかは定かではない。

○音楽部 は昨年夏ブラスバンドを組織し神戸の三谷種吉氏を聘し熱心に稽古してありしが昨年の末方三谷氏都合ありて帰神せられたるより音楽隊も殆んど孤児の姿となりその発達もいと覚束なくみへたりしが捨つる神あれば拾ふ神ありとかにて是迄東京市中音楽隊たりし人々数名近頃岡山に來りて營業せらるゝにあひ右の人々に就き稽古する事となり右数人毎夜態々我孤児院に出張し來て丁寧熱心に教授せらるゝあるなり (『新報』第 9 号, 1 頁, 1897 (M30)年 3 月 13 日)

岡山孤児院音楽隊を巡る音楽環境と、近代日本におけるキリスト教 Band 文化の萌芽をめぐって

少なくとも、三谷種吉が教師になることによって、岡山孤児院において系統だった本格的な指導が開始されたと考えていいだろう。着任後はすぐに礼拝後の讃美歌練習に始まり、「ソルフェージュ（楽典理論）」的な内容も教えたことと考えられる。

三谷種吉は、岡山孤児院音楽隊を指導するまでに手風琴の楽譜集『手風琴曲譜集 第二集』（1891 (M24)年 村上書房、寅寅之助と共著）や『手風琴奏法指南並二和洋流行楽譜集』（1893 (M26)年 上田貞治郎出版）などを著している。

図 2 三谷種吉・寅寅之助『手風琴奏法指南並二和洋流行楽譜集』1893M26 年上田貞治郎出版



(国立国会図書館 近代デジタルライブラリー蔵)

図 3 第二 音階の名として用ひたる数字を以て記されたる譜

(『手風琴奏法指南並二和洋流行楽譜集』より)

	第一節	第二節		第一節	第二節
$\frac{4}{4}$:	:	:	1 : 2	3 : 4
$\frac{4}{4}$:	:	:	5 : 6	7 : 1
	一區二區 三區 四區			四分符	

図 4 第三 手風琴にある押釦の番号を用ひて記されたる譜(同前)

君 々 代

$\frac{4}{4}$	3 : 3	3 : 4	5 : 4	3 : -	4 : 5	5 : 5	7 : 6	3 : 5	4 : 5	3 : -	7 : 6	7 : -	4 : 5	3 : 5
	キ	ミ	カ	-	ハ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	レ	-	イ	シ
	ナ	リ	テ	-	コ	ケ	ノ	-	ハ	-	ス	-	ニ	ヤ

「手風琴」とはアコーディオンとも言えるが、現在のバンドネオンに近いものであり、岡山孤児院の「風琴音楽隊」もそれだった可能性が高い。出版された楽譜集をみると、彼の一般的な愛好家への音楽的な配慮は高く、『手風琴奏法指南並二和洋流行楽譜集』の 2 頁目には、「●此れ小冊子には、誰れも解り易き為め、三種類の楽譜を以て、凡ての曲が記されてあります（出版の都合により第三種の楽譜のみにて凡ての曲譜を知るせり）」（三谷 1893,

2) とある。ここで「三種類」とあるのは、「第一 符を以て記されたる正式の楽譜〔五線譜〕 第二 音階の名として用ひたる数字を以て記されたる譜〔トニック・ソルファ譜〕 第三 手風琴にある押釦の番号を用ひて記されたる譜〔アコーディオンの特性を生かした指番号とソルファ譜方式の混合系〕、の3種である。実際にあるのは、第三の方法であるが、これは奏法とも直結しており非常に興味深いものであるとともに、「楽譜」という間接的な媒体から読者が実際の音に起こすための道筋をいかにわかりやすく示すか、種吉の苦心の様子がわかる。また、彼の音楽的素養は必ずしも「讃美歌」など教会系の音楽に限られたものではなく、むしろ当時の通俗的な音楽に対して開かれていたと言える（資料 1 参照）。

<資料 1> 三谷種吉『手風琴法指南並二和洋流行楽譜集』(1893(M26)年)収録譜

楽譜番号	曲名	楽譜番号	曲名
第一	高ひ山から	第二	チヨンキナ
第三	宮さん	第四	どんどん節
第五	すいりやう節	第六	通はしやんせ
第七	丹後の宮津	第八	琉球節
第九	をかし節	第十	春雨
第十一	梅ヶ枝	第十二	山寺の及び種まき
第十三	伊勢音頭	第十四	よかちよろ
第十五	カツボレ	第十六	アツコーデオンポルカ
第十七	西洋踊はやし	第十八	行進の曲
第十九	大日本行進曲	第二十	行進の曲
番外附録	君ヶ代	第二十二	祭日の歌

三谷種吉は日本の音楽伝道者の先駆けとして知られる人物ではあるが、讃美歌集などを出し始めるのは岡山孤児院を辞めてバックストン²⁶の「松江バンド」に移ってからのことである²⁷。松江バンドに移るのが、1897（M30）年ということであるから、岡山孤児院の音楽教師辞任もそこからのものであるかもしれない。ともあれ、岡山孤児院で働いていた間の三谷は、音楽を教授することができる「同志社系列」の人材であった。

何より、種吉は海外の「音楽隊」（この場合、いわゆる「バンド」）がどのようなもので、どんな役割を担っているかを実際に知っていたのである。神戸出身だった種吉は、1888（M21）年ごろから神戸の旧居留地にあった英国商館で働いており、イタリア人の音楽家について音楽のレッスンを受けていたという。そのイタリア人教師は居留地でも有名でブラズバンドの指揮も行ってた（榊原 2001, 32-33）。この当時旧居留地で活躍していたイタ

岡山孤児院音楽隊を巡る音楽環境と、近代日本におけるキリスト教 Band 文化の萌芽をめぐって

リア人バンドマスターと言えりゼットであり、彼のバンドは神戸で唯一の民間バンドであった。おそらく種吉はリゼットや彼の楽団員から音楽を学んだのであろう。そう考えれば、彼が去った後の孤児院音楽隊に、東京市中音楽隊員が教えに来ることも理解できるように思える。

ここで参考として、三谷が岡山孤児院で教える 1896 (M29) 年以前の著作 2 作にある曲目と、音楽隊が音楽幻燈隊になった当初 (1898 (M31)年ごろ) のプログラム内容を確認してみよう。

<資料 2> 岡山孤児院慈善音楽幻燈会目録(『日誌 明治三十一年』)

* 1898M31 年の日誌に記された「岡山孤児院慈善音楽幻燈会目録」より (『日誌(明治三十一年)』233 頁)。これにより、四国遠征(1898 (M31)年 2 月 5 日～)をこなしたと考えられる

●和曲の部	君か代	愛国	越後獅子	春雨
	深ひ深ひ	琉球マーチ	九連環	十日エビス
	お江戸日本橋	浮世節	かんかんの一	
●軍歌の部	コンロン山頭	敵は幾万	威海衛	軍艦
	垂死の喇叭卒	雪の進軍	平壤の大捷	豊島海戦
	勇敢なる水兵			
●洋曲の部	アンダンテーワルス	ポルカ(おどりの曲)		
	ホワイトロース、ワルス、マスユツト、カドリー(おどりの曲)			
	アクトンソイツクステツブ	ヴクトリーマーチ	ウエルベルチルブ	
	ジョーシアンマーチ(舞踊付)	プロシアンマーチ		
●風琴の部	せとのだんだんばたけ	松づくし	越後獅子	春雨
	洋曲数曲			
●壮士歌及壮士踊数番				
●剣舞数番				
●幻燈の部	景色数 十枚			
	孤児院写真 数十枚			

<資料 2>にまとめたように、1898 (M31) 年当時のレパトリーは、同年の日誌に記された「岡山孤児院慈善音楽幻燈会目録」(『日誌(明治三十一年)』233 頁)である。この目録で、四国遠征をこなしたと考えられる。これをみると、和曲《越後獅子》《九連環》風琴《越後獅子》などは、おそらく三谷によっても指導された曲と考えていいだろう。彼らの手の中に入っていた十八番であったと同時に、客の受けもよい演目だったとも考えられる。

そして、様々な軍歌や舞曲の演奏は、明らかにその後の軍楽隊経験者の指導による影響であろう。

このことから、三谷が指導した半年ほどの間に通俗曲の基礎的なレパートリーが定着し、その後の東京市中音楽隊員の指導では、三谷が期間的にも十分に指導できなかったであろう「ブラスバンド」としての指導ができたのではないかと考えられる。

三谷種吉の音楽歴と同志社卒という関係性からいくと、岡山孤児院の音楽指導にはねがってもない逸材だったに違いない。先にも記したように、音楽をいかに教授し、伝えていくかは、種吉の志向でもあったと考えられる。現在に至るまで、岡山孤児院関係資料で楽譜などの資料は確認されていないが、岡山孤児院音楽隊の指導は、いわゆる五線譜の楽譜ではなく当時教育現場で多く用いられたトニック・ソルファ譜など、文字楽譜を使用した可能性もある。三谷種吉の指導、後の東京市中音楽隊らによる指導によって、園遊会・祝賀会・運動会・開業式などの余興として依頼される音楽隊のイメージが孤児院音楽隊にも定着したと考えられ、その後の活動の具体的な活動イメージにも影響していったことが想像される。

いずれにしても、本格的な音楽隊として「ブラスバンド化」されていく初期段階において、岡山孤児院音楽隊は聖歌や讃美歌といった曲よりも、通俗曲を自らのレパートリーとし、居留地でのバンドなどの存在を踏襲していった。その変化は、東洋救世軍音楽隊だったころの路傍伝道の「注意喚起（客寄せ）」的な音楽利用から、式典などで使われるいわゆる「バンド」的な、「余興の音楽」へと音楽的内容の変化と共にシフトしていったのである。そして、音楽隊はこの後、「義損金獲得（収入）」と「福音伝道」との2つの目的の間で、石井十次の考えの揺れと共に、絶えずその狭間を揺れ動いていく。

IV. 近代日本におけるキリスト教バンド文化の萌芽：「福音伝道」と「娯楽音楽」の狭間で

i. 救世軍 Salvation Army における「音楽」の利用目的との違い：「岡山孤児院音楽隊に与えた影響」という誤解

岡山孤児院内で行われていた音楽に関する事象から、石井十次による音楽の利用法は3つの段階 ①シグナル・合図（時報・次の行動を知らせる合図）としての利用 ②宣伝のための注意喚起（「呼び込み」）としての使用 ③余興としての利用、を経て音楽隊を準備していったことがわかる。また、音楽隊の結成と、全国巡回にあたっては、現段階では指導者の音楽性が強く働いたことが指摘されるであろう。

これまで見てきたことから明らかなように、岡山孤児院音楽隊は、救世軍の影響を受けてきたと先行研究で言われてきたが、そうではなく、むしろ日本の庶民が身近に接していた音楽状況を反映してきたものであると言える。それを確認するためにも、石井十次が音楽隊結成を発想するのに影響を受けたと言われるウィリアム・ブース『最暗黒の英国とその出路』において、音楽について例えばどのような記述があるか、少し長いが引用しておく。

岡山孤児院音楽隊を巡る音楽環境と、近代日本におけるキリスト教 Band 文化の萌芽をめぐって

「諸君はもちろん、いくらかでも持ち金のある限り、救貧院の「浮浪者收容所」へは行き得ない。諸君は私ども〔救世軍〕の簡易宿泊所の一つにやってくる。 - 中略 - 八時になると簡易宿泊所はかなり一杯になる。そそこで私どもが全事業の中での欠くべからざる特色と見なすものが始まる。 - 中略 - 彼ら〔簡易宿泊所の利用者〕は大抵お互いに見知らぬ間柄である。彼らはことごとく貧乏に悩んでいる。一君なら彼らをどうするか。私どものやり方はこうである。

私どもは元気のいい救霊集会を催す。その施設の主任士官は、「救世軍士官学校」から配属された人々に補佐されて、快活な肩のこらない社交的な夕べを指揮する。婦人らはバンジョー（五・六弦の弦楽器）やタンバリンを持っていて、二時間くらい諸君はロンドン中でも珍しい陽気な集会に列する。祈祷があるが、短くて要を得たものである。講話があつて、人々は、その席に立ち上がって彼らの仲間に自分らの経験を語る。 - 中略 -

私どもの集会に出席した人は誰もが証言する如く、決して長たらしくなく、信心ぶらず、気取らない話であり、個人的経験の素直な告白である。一心情のこもった旋律が響きわたる。集会の指揮者は、前の話しての述べた経験を表すような聖歌を一、二節歌いだす。あるいは士官学校から来た娘らの一人が器楽の伴奏つきで独唱し、折返しになると一同が威勢よくはしゃいでこれに加わる。

私どもの宿泊者らの誰一人として集会への参加を強制されない。集会がすむまでこなくても差支えない。しかし解りきった事実ながら、彼らはやってくる。どの夜も八時から一〇時の間これらの人々がそこに座って、勧告に耳を傾け、歌に加わっているのを諸君は見出すであろう。疑いもなく彼らの中の多くは、あまり共鳴はしないが、それでも出席して音楽や暖か味に接することを好み、そしてかりに単なる好奇心によるにせよ、述べられるさまざまな証言によって、かなり感動する。（ブース『最暗黒の英国とその出路』 pp.126-127）

このように、救世軍の集会で歌われるのは聖歌が中心であり、あくまでも音楽によるアイスブレイク的な要素を含んでいたと考えられる。さらに、以下のような救世軍の音楽の使用は、救世軍の音楽の使い方と石井による岡山孤児院でのそれとでは、大きな違いがあることがはっきりする。

私は其の男〔貧しく人間らしい扱いを受けていない人〕を引き受け、強い腕をもって彼を支え、彼が殆んど窒息させられようとしている泥沼から、彼を脱出させることを提案する。 - 中略 - 「君は飢えている、ここに食物がある。 - 中略 - 君がこれらをすませた後に、盛んな集会が営まれ楽しい音楽と心温まる人間の交わりがある。」

（同前, 137）

彼〔牧師だったがアルコール中毒で職を失い家庭崩壊した人物〕はもう一度集会へ戻ったが、また途中で出て居酒屋へ向かった。彼は落ち着けないで、三度目に〔救世軍の〕軍営に戻った。彼が最後に入っていくと、兵士らは歌っていた―

はかりしられぬ　ふかきめぐみを
おもえばわれは　つみいとおもし²⁸

この歌がさらに深い感銘を与えた。 - 中略 - 長い苦闘の後に、希望が湧き、彼は跪いて、罪を告白して、救いを得た。

(同前, 230)

つまり、それぞれの活動において「音楽」の占めた位置や意義は、まったく別物なのである。これだけ違えば、先行研究中に引用されている、1907 (M40) 年ブースが岡山に来た際に石井が『日誌』に以下のように記したのは当然であるとも言えよう。

[1907 (M40) 年 5 月 15 日付] 一、とても日本人は『ブース』式には救はれぬ -
中略 - 四、よーまーあんなことが真面目にやれることじゃ
(石井十次『日誌 (明治四十年)』80 頁, 1977 年)

それほど、石井が実際に触れた救世軍の音楽や軍楽隊は、彼が想像していたものと違っていたのである。ここで、救世軍が日本宣教を開始した 1896 (M28) 年前後の、石井との関係について触れておこう。

音楽隊がブラスバンド化していく頃 (1893 (M26)-1896 (M29) ごろ) と、石井十次が救世軍に再び急激に傾倒していく時期は、重なっている。年表を見るとわかるように、それ以前の 1891 (M24) 年 2 月 20 日に、石井は初めて W.ブースのことを『聖書之友』三八号に掲載された「救世軍のおんな將軍ブース夫人伝」と、『六合雑誌』第一二二号 (1891 年 2 月) に掲載された植村正久による「將軍ブース氏の廢人利用策」の、両記事を通して知ることになって以来 (室田 1998, 100-101)、救世軍に急速に傾倒していた。その様子は『日誌』から窺えるが、実際にブース將軍の代表的著作 “In Darkest England and The Way Out” (1890 年: 邦題『最暗黒の英国とその出路』) を入手するのは、青木要吉により翌年 1892 (M25) 年 1 月 2 日のことであり、さらに読み聞かせてもらうのは山本徳尚から 5 月 4 日になる。ブースを知ってから、直接本を手に取り読んで聞かせてもらうまでに 1 年あまりかかっている。『日誌』によれば、救世軍とブースへの傾倒 (想い) は、この間も途切れることなく、1896 (M28) 年 9 月初旬のライト率いる救世軍の宣教開始により、いっそう現実味を増し、神に与えられた使命として熱を帯びていくのである。

[1896 (M29)年 7 月 6 日付] (五) 所感一、 ブース將軍若し日本救世軍を余が手に委任せば救世軍は必ず東洋に全勝を占むべし
(『日誌 (明治二十九) 年』 228 頁, 1967 年)

[1896 (M29)年 7 月 10 日付] (九) 所感一、 「ブース」氏余に日本救世軍委任せばとは何事ぞ
二、爾は已てに主より直接に東洋救世の大佐を委ねられしにあらざるや
三、ああ、進行薄きものよ
(同前 228 頁, 1967 年)

このあたり、救世軍への思いの振幅の差の激しさ表れているが、その数日後の 7 月 13 日、いよいよライトが岡山に来て岡山孤児院を視察するのである。ライトと対談し、「直接の伝道には君之れに当たれ、余は自ら任して社会救済の方面を当たらん、ああこれにて救世軍問題がきまった」²⁹とした十字は、「凡そ事業は孤児院の名を以てするよりも 救世軍の名を以てする方可なり」³⁰というところまで考える。そして、ついに 8 月 10 日に救世軍入隊を決意に至るのである³¹。しかし、この背景には以下のような教会批判があったと考えられる。

[1896 (M29)年 7 月 28 日付] 「(十一) 救世軍集會に列す - 中略 -
二、 現今の教会は水の如し……救世軍は湯の如し 甲は入會後冷却の恐れあるが故に入會前にへ理屈を教え乙はいかなるものもどうかするの能あるが故に即今の悔改入會を促す之れ救世軍が他の教会と異なるといころなり ああ熱愛をしてどこまでも救世軍の大感化たらしめよ 屁理屈は空なり 実行的の相愛は能なり」
(同前 254 頁, 1967 年)

肝心のライトは 1 年ほどで妻の病気が原因で帰国してしまう。しかし、その間に彼は『救世軍軍歌』の編集に携わっている³²。1 年ほどであったにもかかわらず、立派な装丁であり、73 曲の「軍歌」と、頌歌 2 曲、37 曲の、諧歌 (ツレブシ: 現行では「コーラス」) が日本語に訳され、掲載されている。見たところ、そこに掲載されている軍歌については、英国の救世軍軍歌のみと思われる。しかしながら 1898 (M31) 年には、山室軍平によって日本語の軍歌が作られていたことがわかっており³³、現行の日本救世軍軍歌にも多くの山室軍平作の軍歌が収められているので、『ときのこゑ』初刊以降を丹念にたどっていく必要があるだろう。そのような下地がありつつ、救世軍の軍楽隊が実際に日本に展開するのは、1902 (M35) 年まで待たなくてはならない。

此度救世軍に於いて軍楽隊が編成され、幻燈を携へと東海道筋より中国、四国に押し出だすと云うに付いては、~~中略~~ 我軍中に軍楽の進歩の一階段として之を喜ぶ ~~中略~~ [救世軍は] オルガンと琴の他に尚種々なる楽器を、悉く宗教の為に用ふるものである。(救世軍『ときのこゑ 第博四十七号』1902 (M35)年 2月 1日付)

先にも述べたように、救世軍が音楽を用いるのは、伝道のためであり、人々を回心へと導くためである。創始者ブース大將がもともとはメソジストの牧師で、そこから分派した生い立ちをもつ救世軍の音楽は、『最暗黒の英国とその出路』に出てくる内容を見る限り、ジョン・ウェスレーの音楽の使用法に忠実に従っている。メソジストの音楽は、「センチメンタルで情緒に訴えがちである」とよく評されるが、まさに救世軍の音楽の利用がそれである。ジョン・ウェスレーはすべての教会での説教を国教会から禁じられたとき、「路傍伝道」をはじめ、その際「熊使い」や「鬮鶏」の呼び込みに倣って、まず音楽で引き寄せた。確かにその点においては、伝道隊の「呼び込み」に喇叭を使用した石井十次のやり方とそれほど違わない。しかし、後にウェスレーが『讚美の心得 The 'Directions for Singing'』と題した文章を、自らが編纂した讚美歌集に付けるようになったのは、讚美することや讚美歌(歌詞と旋律 Tune)に、会衆讚美としての特性を生かし、信徒教育につながる多くの機能を組み込んだためである(山本 2012, 44-45)。

ii. バックストンの不信

バンド化につれての音楽隊活動の拡充において、「福音伝道」と「義損金獲得」の目的は、石井の中では必ずしも相反するものではなかったようである。「至るところの市町村に於て音楽的集会を開き孤児院のために義損金品を募集し且つ種の福音を宣伝せん又た可ならずや」(『日誌(明治二十九年)』392頁, 12月3日付日記)と至って当然のものであった。

しかし、海外からの宣教師にはそのように受け止められていたわけではなく、松江バンドのバックストンは、1898 (M31)年 6月に松江に訪れた石井に、音楽隊の活動はあくまでも伝道目的であるべきだということを伝え、クギを刺すのである。

[1898 (M31)年 6月 13日付] (九) 四時より「バックストン」師を赤山に訪問

一、音楽幻燈隊の運動の方針を改めて純然たる証明的事業となすべしと忠告

[1898 (M31)年 6月 14日付] (二) 音楽隊一同は十一時より「バックストン」師に招かれ

余が昨日受けたると同じ忠告を師よりうけたり

(石井十次『日誌 明治三十一年』217頁 1969年)

岡山孤児院音楽隊の松江訪問は、1896 (M29)年 12月のバックストンからの招き³⁴に1年たつてようやく応じたものであり、1898 (M31)年 2月から始まった中国四国地方巡回

に次ぐ、ごく初期の活動である（菊池 1997a, 77）。菊池によると、1898（M31）年 2 月 5 日から始まる四国巡回は、「寄附募集隊」という名前を付けられており、かねてからの借金の返済のために寄附募集を前面に出したものであったとする（同前）。確かに、そういう面はあったと思われるが、先の引用（1896（M29）年 12 月 3 日付『日誌』）にもように、孤児院の宣伝が福音伝道となるということを、どこかオーバーラップさせながら考えていたことが想像される。

しかし、バックストンの忠告は、それまでの山陰地方の岡山孤児院音楽隊巡回の様子を伝え聞いてのことと考えられ³⁵、それを通して、彼は音楽隊活動の危うさとそれを率いる石井十次の信仰的不安定さに危機感をもったのだろう。石井はついに、以下のようにこぼすのである。

〔1898（M31）年 6 月 16 日付〕（二）静思黙想 一、バックストン師尚ほ未だ全く予を信ずること能はず、猶ほ恰もバプテスマのヨハネが牢獄に於て主イエスを疑ふたるが如し（『日誌（明治三十一年）』220 頁, 1969 年）

V. おわりに

冒頭で述べたように、先行研究において岡山孤児院音楽隊については、児童養護（福祉事業）の観点からの活動研究に関するものが中心であったため、音楽的内容にふれたものは無かった。しかし、音楽的内容から、岡山孤児院と音楽隊活動をみることによって、その音楽が①時報（シグナル・合図）としての利用 ②宣伝のための注意喚起（「呼び込み」）としての使用 ③余興としての利用、の 3 段階を経てバンド化していったことがはっきりとした。このことは同時に、①キリスト教音楽における 1 ジャンルである器楽音楽が、一般大衆のための民間の「バンド文化」として関西で、しかも子どもの手によって始まったこと、②当時の豊かな世俗曲（謡も含め）を背景としたキリスト教音楽が存在し、それが大衆のキリスト教に関するイメージを形作る要素ともなっていた。ということを示している。

しかし本稿では、②についての考察はまだ十分になされたとは言えない。その研究には、例えば日本救世軍軍楽隊における「軍歌」の歌詞の扱いや、日本産のチューン（Tune 旋律）の扱い、またその組み合わせや、救世軍軍楽隊 Salvation Army Staff Band の歴史的変遷と初期のプログラムの検討なども必要であろう。少なくとも、現時点で確認される救世軍軍歌の文化に受け継がれているチューンや歌詞の扱いは、ジョン・ウェスレーやチャールズ・ウェスレーを始めとしたメソジスト派の源流を引き継ぐものである。だとすれば、山室軍平ら救世軍による「軍歌」（讚美歌）は、日本にかつて土着化したチューン文化の 1 例であると言えよう。

「学校の唱歌教育は音を卸したのである。軍楽隊は大衆の耳にも壮快な響きを伝へたのである。洋楽と民衆とはこの二つの面〔唱歌と軍楽〕で既に接触してゐる。それが、日清戦役前の軍国的雰囲気の影響されて、軍歌の普及と市中音楽隊の創立となつてあらはれ、洋楽の民衆化を先駆した。軍歌も市中音楽隊も其の起源に於いては輸入的な形を持つてゐたが、時局になり姿勢的になると共に日本的な分子を加へた。」（堀内 1942, 132）

という堀内の指摘する流れは、日本のキリスト教音楽にも言えることである。キリスト教の日本化や東洋化を標榜する石井十次だけでなく、その影響を強く受けて救世軍に入隊した山室たちが向かったのが、「讚美歌」ではなく俗謡や軍歌であったことは自然の流れとも言えよう。

この時代の「日本大衆への福音伝道」については、さらにオルチンの幻燈伝道も、外国人宣教師による純粋な「伝道活動」として、検討するべきものである。

「明治廿七年に日進戦役が起ると、其の時まで全国に流行してゐた明清楽がぱたりと絶滅した。どんな文化をも包容する日本人も、敵国の文化に対してだけは潔癖であつたのだ。」

（同前）と堀内が言うのがある程度あたっているのであれば、敗戦後の日本において軍国主義を背景にした「唱歌」や「軍歌」が学校教育で教えられなくなり、讚美歌の中からその記憶をもつ讚美歌や Tune が消えて行つた時、それまでのキリスト教音楽の一つの部分が失われたとも言えるのかもしれない。「軍歌と讚美歌」は、ある時代の日本の大衆にとってのキリスト教を語るものでもある。命をかけた信仰は、日本だけでなく西洋諸国においても「戦い」の概念を伴い、軍歌と結びついた讚美歌をこれまで多数生み出してきた。聖書の言葉に導かれた讚美歌の歴史に「軍歌」に通じる流れが常にあり、時代によっては簡単に「戦い」へと人々を誘つてきたこともまた然りなのである。

¹ 「岡山孤児院で、明治期から大正期にかけて保護した児童は、約 3,000 人。濃尾大震災、東北地方凶作地児童の保護などから入所児童が膨大に増え、一時期 1200 人を越えた。その中には、数人の海外の子どもたちも含まれていた。」（石井十次研究会『写真・映像で綴る岡山孤児院 - 石井十次と岡山孤児院の養護実践』2006年 第3章スライド27）

² サミュエル・スマイルズ(Samuel Smiles 1812年 - 1904)『自助論』に出てくる靴職人パウレンズの逸話について、石井は「スマイルズの『自助論』にある靴直しジョン、バーンズが、靴を修繕しながら5百人の孤児を養ひし事を読み大いに感じ、自分も斯の如くやらんと思ひました」と記している（石井十次「孤児教養の理想」『人道』第20号, 1906）。

³ 細井が菊池の区分を引用したものであるが、引用本が不明。それでも、岡山孤児院の変遷を見るには有益であるため、ここに筆者の加筆と共に掲載する。なお、岡山孤児院の時代区分については、基準とするデータや視点が違うという理由、また研究者の立場によっていくつか存在する。〔 〕筆者。

第1期〔1887 - 〕：岡山孤児院の創設から孤児院学校の開設

第2期〔1891-〕／3期：博愛社（1890 - 小橋勝之助／實之助）との合同〔1991年10月2日 - から震災孤児救済、合同の解消

第4期〔1898 - 〕：慈善音楽幻燈隊の組織化と全国展開、地方委員制度の発足、賛助院一万人構想、『岡山孤児院新報』発刊。

第5期〔1906 - 〕：東北大凶作貧孤児救済、日向移住の再開、里親委託事業、大阪事務所開所〔1907 M40〕

第6期〔1910 - 〕：大阪事務所・岡山孤児院・茶臼原孤児院の三部制展開

第7期〔? 1914 T3 - 〕：石井十次死亡〔1914年1月30日〕、事業規模縮小

第8期〔1915 - 〕：大原孫三郎による事業の再編成（各事業の分離：大阪分院の廃止、財団法人石井記念愛染園の独立、救済事業研究所設置、松本圭一による茶臼原での農場学校開設〔1915〕

第9期〔1919 - 〕：大庭猛理事長時代。済美財団設置、農場学校解散

第10期：岡山孤児院解散〔1926〕

4〔孤児院音楽隊が〕全国各地を巡回して岡山孤児院の実践（仕事）を紹介した活動であったという点で、当時の日本の民衆に貧孤児救済という慈善事業を啓蒙した最初で最後の活動であったとの理解をもっている - 中略 - 岡山孤児院の音楽幻燈（活動写真）隊が全国各地を巡回することで、日本の民衆の間に岡山孤児院という具体的な慈善事業が認識され、幻燈（活動写真）を見たり、寄付をする行為を通して1人ひとりの民衆の中に明確にそれが実態化されて行く過程があったと判断する - 以下略 - （菊池 1997a, 69）

5 児島城一郎編「岡山孤児院」『石井十次日誌（明治31年）』681, 682 石井記念友愛社

6 本日ハ宣教師ペター氏等ヨリ金疲拾五圓東洋救世軍楽隊ノタメトシテ寄付セラル因テ本日帰申セラレシ風琴音学会長三谷寅之助君ニ風琴其他楽器ノ買入方ヲ委託セリ
（『月報』第4号，1893（M26）年、7面1893年11月20日）

7「十月五日 連夜祈祷会の終の日三四の年長青年と共に祈祷会の後にて赤痢病の善後策を講せり一策は出てたり曰く音楽隊を招き日向の各地を巡回し岡山孤児院の何物たるをことを紹介し寄付金を募集して前後の策をつけんと一同賛成、」十一月九日 晩延岡教会堂にて親睦会を開き音楽隊を招かる。延岡の終止者は孤児の赤痢にかかりし当時より非常の同情を以て多額の金支那を恵送せられたり…」（石井十次「日向に於ける幼年部の赤痢及び音楽隊の運動」『岡山孤児院新報』第16号第3面1897(M30)年12月18日発行）

8「一八八七年（明治二十年）前後、近代化・西洋化が奨励されたにもかかわらず、西洋音楽は民間になかなか浸透していかなかった。時代は下がるが、例えば一九三〇年代になっても、ラジオ番組で圧倒的に支持されていたのは浪花節や講談、落語であり、西洋音楽はまだ違和感を持って受け止められていた時事からもうかがい知ることができる。 - 中略 -

一八九〇年前後（明治二十年頃）から吹奏楽で登場した市中音楽隊にはかなり質のいいものもあり - 中略 - ジンタ（市中音楽隊）は主に広告の町回りに使われていたが、例えば、八六年（明治十九年）十一月に設立された最初の民間吹奏楽団・東京市中音楽隊は園遊会・祝賀会・運動会・開業式などの出演依頼も多く受けたし、海軍軍楽隊出身者を中心に結成された東洋市中音楽会も単なる広告宣伝をおこなうチンドン屋のような民間吹奏楽団を超えて、演奏会用の吹奏楽団として活動した。しかし、一九〇〇年頃（明治三十年代）になると、市中音楽隊はすっかり質が低下して低俗なジンタに陥り、さらに日露戦争後、ロシアとの戦後処理をめぐって焼き討ち事

件などの社会的事件が起こると、多人数での街路行進が制限され、明治の末年頃、市中音楽隊はついに解散してしまう。」(三枝 2013, 33)

9 「[1 月 30 日付] 今晚本院会堂に於て幻燈音楽会を開きたりこの幻灯器械はオルチン氏の一方ならぬ尽力に因れるなり吾等は同氏に深く感謝せざるへからず」(『日誌』の項目『岡山孤児院新報』第 18 号 第 1 面 1898 (M31)年 2 月 28 日発行)

10 「軍楽隊の編成：此度救世軍に於て軍楽隊が編成され、幻燈を携へて東海道筋より中国。四国に押し出だすと云うに付いては、私し共は是亦神の軍隊の日本に於る進歩の一会談として之を祝ふ者である。」(『軍楽隊の編成』『ときのこゑ 第四百七号』1902(M35)年 2 月 1 日)

11 「石井十次君は痔の手術を受くために、上京して同志社病院に入院せられた。 - 中略 - 其の少し前に石井君の友人某氏〔青木要吉〕が米国から救世軍の創立者、大将ウィリアム・ブース著『最暗黒の英国及びその出路』という一書を贈り、『此は目下欧米諸国で大層評判の高い書物であるから、一部贈呈する』というて来た。そこで君は其書物を携えて入院し、同志社の学生にて英語に堪能なる山本徳尚君といふ人に頼んで、毎日之を其の枕許で訳読してもらい、私は又毎日出かけて行って、其聞書を作ることとなつた。」

(山室軍平『私の青年時代』(1929、救世軍出版及供給部) pp.122-123)

12 岡山孤児院『石井十次日誌 (明治二十五年)』, p.36, 1960 年

13 室井は「ここには『軍隊の喇叭隊』とあり救世軍様式が窺え、後の音楽隊の萌芽を想起させるものである」としている。(室井 1998, 110)

14 「(十三) 晩街道の演説会に列す 本夕は満堂立錫の地なく且つ堂がいにも人山をなせり - 中略 - 会堂以来の始めての大集会なりと終わりに軍隊の喇叭隊四名が君が代を奏す実に活且つ肅一同勢を将て散す」(『日誌 (明治二十五年)』, p.272, 1960 年)

15 文末注 8 参照：「一八九〇年前後 (明治二十年代頃) から吹奏楽で登場した市中音楽隊にはかなり質のいいものもあり - 中略 - ジンタ (市中音楽隊) は主に広告の町回りに使われていた」(三枝 2013, 33)

16 実際の日誌には、7 月 23 日の日付で同じ内容が書いてあり、町名も「上道郡倉竹村」に向かったとある。「(六) 午後二時伝道隊 (殆ど百人) は 上道軍倉竹村に向かつて進撃」(『日誌 (明治二十六年)』, p.173, 1962 年)

17 なお、日誌には以下の通り。

○十一月 三日 天長節

(五) 第二時より天長節祝会演説会を開らく

(一) 君が代 (二) 祈祷—炭谷姉 (三) 祝天長節 正富君 (四) 風琴 清水君

(五) 和氣清麿呂公—小野田君 (六) 備後三郎公—佐々倉君 (七) 忠臣の歌を誦して

散会

(岡山孤児院『石井十次日誌 (明治二十六年)』, pp.303-304, 1962 年)

18 この祈りは、同年 8 月 4 日の「墓禱」(文末注 22) に対応。(『日誌 (明治二十九年)』, 8 月 4 日付日記, p261, 1967 年)

19 「◎音楽隊 一の完全なる音楽隊を設んとは吾人が兼てののぞみなりしか中にも熱心之か為に盡くすは我小野田鉄弥兄にして年来熱禱計画せし処なるか神は此度数個の楽器と剩へ関西音楽師三谷氏まで与えられ茲に楽隊を設くる事となりぬ」(『新報』第 2 号 1896 (M29)年 8 月 15 日付発行)

20 [1890(M23)年 12 月 8 日付] 「(八) 所感 吾人は優美の感情なかる可らう之れを養ふに適當なるものは音楽なり、あゝダビデの楽器を愛せしルーテルの音楽を好みし寔に所以ある也」(『日誌 (明治二十三年)』 p419, 1959 年)

21 三谷種吉 (1868-1945)、岡山孤児院には、1896 (M29)年 7 月 24 日?より音楽教師として着任。後にバックストンに師事。聖学院で開かれた世別大会で (おそらく聖公会の) 按手礼を受けたのが 1904 (M37) 年 12 月 31 日という (榊原 2001, 67)。

22 [1896(M29)年 8 月 4 日付] 「(三) 墓禱一、音楽器を与えられたることを感謝す 祈り始めてより三十九日目に教師に添えて楽器をあたえらる感謝に堪えず」(『日誌 (明治二十九年)』 p261, 1967 年)

23 「(三) 墓禱二、小野田君と共に音楽部より主の聖名を讃美し福音伝道の助けをなす音楽者の出でんことを祈禱せり」(『日誌 (明治二十九年)』, 8 月 4 日付日記, p261, 1967 年)

24 「◎音楽部 三谷教師の熱心なる尽力と部員一同の勉強に由りて、近来著しく進歩し、制服も新調せられ、楽器も大方揃ひて、先つ一通の楽隊 (ブラスバンド) を組織せられ、各地よりの招聘に応じ居れり。」(『新報』第 7 号, 明治 30 年 1 月 21 日付発行)

*但し、この報告は前年 12 月の状況を報告したものである。

25 「東京市中音楽隊」は「東京市中音楽会」と同意。「東京市中音楽会」は民間初の吹奏楽団。188 (M19) 年 11 月、海軍軍楽隊出身者の加川力 (カガワツトム)、井上京次郎、平岡啓二郎、西村源八、芳ヶ原嘉成、古賀?により設立。練習の後、1887 (M20) 年正式にスタート。アメリカ軍艦の乗組員だったリゼット (リゼッチとも R.A.Rizetti) という名のイタリア人 (フランス人という説もある: 谷岡 2001, 11) を楽長に雇い入れる。後に東洋市中音楽隊と合併。リゼットと加川は派閥争いに敗れ、神戸オリエンタルホテル付きの「神戸市中音楽会」を 1892 (M25) 年に創始。(堀内敬三『音楽五十年史』鱒書房 1942, pp.142-146) おそらく、三谷種吉はリゼットが神戸市中音楽隊のバンドマスターをしていたところに知り合ったと思われる。

26 バークレイ・フォーエル・バックストン (Barclay Fowell Buxton, 1860 年 8 月 16 日 - 1946 年 2 月 5 日) 1885 年に英国国教会司祭。1890 年来日。裕福な家庭の出身だったため、日本の宣教についても超教派的に資金援助を行う (榊原 2001, 47)。

27 『基督教福音唱歌』棘焔漁夫 (ペンネーム)、博廣社、1898(M31)年 11 月 11 日発刊。改訂版 1900 年に教文館より、楽譜付き改訂版が 1901 年にバックストンにより出版 (榊原 2001, 54-55)。

28 訳者注によると、邦文『救世軍歌集』74 番 チャールズ・ウェスレー作詞 (『最暗黒の英国とその出路』 p.230

29 [1896 (M29)年 7 月 13 日付] 「(五) 所感」(『日誌 (明治二十九年)』 239 頁, 1967 年)

30 [1896 (M29)年 7 月 20 日付] 「(四) 偶感」(『日誌 (明治二十九年)』 245 頁, 1967 年)

31 [1896 (M29)年 8 月 10 日付] 「(四) 断然決心して救世軍に入る - 中略 - (八) 救世軍の一兵士として救世軍の集会に列す」(『日誌 (明治二十九年)』 272 頁, 1967 年)

32 編集・発行 山室軍平『救世軍々歌』救世軍日本々営 東京 日本司令官エドワード・ライト大佐』, 青山学院事業部, 1896 (M29)年 10 月 23 日

33 「二、 そらかさきもり地は震ひ 山室中将がカンダ小隊長時代明治三十一年のクリスマスの少し前に作られしもの。三十二年一月一日号の「ときのこゑ」に掲載されてある。〔Tune :

旋律] 『勇敢なる水平』は明治二十八年初頃に奥好義氏が佐々木信綱氏の歌詞に作曲せるもの。」(山室武甫「救世軍歌物語(一)」『救世軍士官雑誌』1944(S19), 24頁)

³⁴ [1896 (M29)年 12月 13日付] 「(七) 松江バックストーン師より若し音楽隊来松して伝道の助けをなさば旅費二十円を寄附すべしと返答来る」(『日誌(明治二十九年)』406頁, 1967年)

³⁵ [1898 (M31)年 6月 8日付] 「(四) 八時より開会

聴衆無慮二千人—第二回幻燈の際徴収中に喧嘩を始めたために幻燈を中止し奏楽のみをやり…」(『日誌(明治三十一年)』212頁, 1969年)

<参考文献>

ブース, ウィリアム『最暗黒の英国とその出路』山室武甫訳, 相川書房, 1987

長谷川博史「J・J・ルソーにおける音楽と人間」『紀要』第14巻 聖徳大学 185-215, 1981

Holz, R. Ronald. Brass Bands of The Salvation Army: Their Mission and Music Vol.1 England, 2006

堀内敬三『音楽五十年史』鱒書房 1942

細井勇『石井十次と岡山孤児院』ミネルヴァ書房, 2009

『石井十次日誌(明治二十五年)』社会福祉法人石井記念友愛社, 1960

『石井十次日誌(明治二十六年)』社会福祉法人石井記念友愛社, 1962

『石井十次日誌(明治二十七年)』社会福祉法人石井記念友愛社, 1963

『石井十次日誌(明治二十八年)』社会福祉法人石井記念友愛社, 1964

『石井十次日誌(明治二十九年)』社会福祉法人石井記念友愛社, 1967

『石井十次日誌(明治三十一年)』社会福祉法人石井記念友愛社, 1969

『石井十次日誌(明治四十年)』社会福祉法人石井記念友愛社, 1977

石井十次研究会『写真・映像で綴る岡山孤児院—石井十次と岡山孤児院の養護実践』2006

一色哲「メディアとしての音楽幻燈隊と岡山孤児院」『キリスト教社会問題研究』同志社大学人文科学研究科キリスト教社会問題研究会 49-66, 1995

菊池義明「岡山孤児院の音楽岩頭(活動写真隊の活動と養護実践のかかわり—研究の目的と全体の動向を中心に—)」『共栄児童福祉研究』第4号 69-121 共栄学園短期大学, 1997a

菊池義明「東北三県凶作貧孤児収容後の岡山孤児院の音楽活動写真隊の活動内容」『東北社会福祉研究』第16号 1-53, 1997b

菊池義明「岡山孤児院の財政と石井十次—岡山孤児院の実践を可能にした財政的条件とは」『石井十次の研究』同志社大学人文科学研究科 245-303, 1999

救世軍『ときのこゑ 第百四十七号』1902(M35)年 2月 1日付

姜克貫「石井十次の思想新論—その社会性をめぐって」岡山大学文学部紀要 第43号 114-144, 2005

三谷種吉・寅之助『手風琴曲譜集 第二集』村上書房, 1891年(国立国会図書館近代デジタルライブラリー)

室田保夫「石井十次と東洋救世軍」『キリスト教社会問題研究』第46号 95-131 同志社大学, 1998

-
- 岡山孤児院『岡山孤児院月報』第1号, 1893 (M26) 年8月15日
岡山孤児院『岡山孤児院月報』第4号, 1893 (M26) 年11月20日
岡山孤児院『岡山孤児院新報』第16号, 1897 (M30) 年12月18日
奥中康人『国家と音楽』春秋社, 2008
奥中康人『幕末鼓笛隊(阪大リーブル037)』大阪大学出版会, 2012
小野修三「明治日本における石井十次と救世軍に関する一考察」『慶応義塾大学日吉紀要 社会科学 (22)』74-52, 2011
三枝まり「多様化する吹奏楽」『日本の吹奏楽史 1869-2000』【27-54】青弓社, 2013
上野正章「明治期末の松江市における音風景について—楽隊の普及との関連から—」『日本伝統音楽研究』第7号 京都市立芸術大学 17-35, 2010
谷岡史絵『神戸居留地における音楽』神戸大学大学院総合人間科学研究科 修士論文, 2001
都賀城太郎「スクールバンドと吹奏楽の普及」『日本の吹奏楽史 1869-2000』【59-87】青弓社, 2013
山本浩史「石井十次の教育思想における真正の教育の成立過程—明治二七年ルソーの影響を中心に」『社会福祉学』第51巻 第4号 18-30, 2011
山本美紀「『人間教育』と音楽の力—讃美歌に託された神学と教理—」『人間教育学創刊号』人間教育学会 39-45, 2014
山本美紀『メソヂストの音楽—福音派讃美歌の源流』ヨベル社, 2012
山室軍平『私の青年時代』救世軍出版及供給部, 1929
山室軍平「石井十次君とわたし」『石井十次伝』石井記念協会, 420 - 444, 1987 (復刻)
山室武甫「救世軍歌物語(一)」『救世軍士官雑誌』, 24 - 34, 1944

(やまもと・みき 奈良学園大学人間教育学部准教授)